

檀信徒各位

ぎよきほうよう
御忌法要のご案内

聖名 新年明けましておめでとうございます。

今年もよろしくお願い申し上げます。

さて、例年1月の「御忌法要」を迎えることになりました。

日本のお念仏の元祖、浄土宗開祖（法然上人）の祥月命日にあたる1月25日の法要です。

浄土宗久留米門中寺院ご出仕のもとに、下記の通り勤めます。ご多忙の折柄、恐縮乍ら、何卒万障お繰り合わせご参詣下さいますよう、ご案内申し上げます。 合掌

平成25年1月上浣

無量寺 住職 堤 俊翁 拝

記

※期 日 平成25年1月25日（金曜日）

※時 間 午後1時より 法 要、御 回 向
午後2時より 法 話

※布教師 山上 光俊師

※ご回向料

普通回向 1 霊 1,000 円以上

※お供え米、お供え米料 随意ご志納下さい。

毎日の本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

※郵便振替等で申し込まれる方も位牌型をお送り下さい。

筑後西国三十三観音霊場 第十八番札所
しょう
 聖 観世音菩薩 開眼式厳修

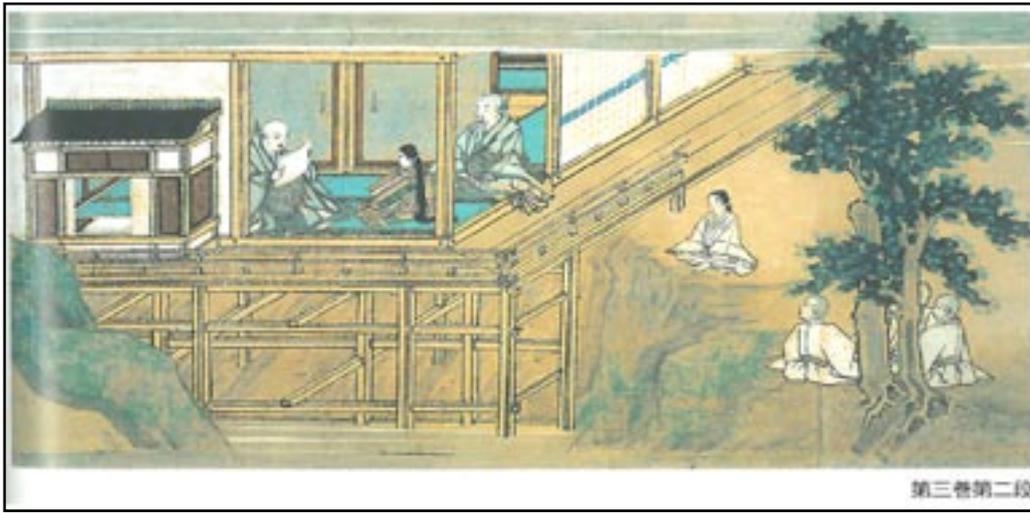


筑後三十三ヶ所観音霊場、第十八番札所 聖観世音菩薩が開眼の日を迎えました。

当日は朝方、雨が降っておりましたが、開眼式の最中には陽がさしてきて、観音様が微笑まれたかのようでした。毎月、写経とお念仏の会にお参りいただき、熱心にお勤めに励まれ心静かにお写経をされている姿、また、ご志納いただいた銅板、真鍮板は観音様のお姿に形を変えております。

その他金銭的にご志納いただきましたおかげで、当初の目標より早く建立にこぎ着けましたこと、偏に佛天のご加護、皆様のお志の結晶と感謝申し上げます。 合掌 第二十三世住職 秀誉 俊翁 拝

写経納経料	903,000 円	観音像铸造費	4,000,000 円	引続き写経納経	
銅板、真鍮板志納	1,116,000 円	台座	3,570,000 円	ご志納金の受付を	
特別志納金	5,406,000 円	焼香台	840,000 円	致しますので、よ	
		造園費	350,000 円	ろしくお願い申し	
計	7,425,000 円	12月25日現在	計	8,760,000 円	上げます。



第三巻第二段

法然上人絵伝

第三巻第二段

勢至丸、源光上人より『四教儀』を授かる

岩にせり出した建物は比叡山北谷の持宝坊で部屋の中で手に巻物をもった源光上人であり、その前には稚児姿の勢至丸、と若い僧が同席している。観覚上人の手紙に「進上文殊菩薩」とあったので、源光上人は早く勢至丸に会って頭のよさを試したかった。そこでさっそく『四教儀』を授けた。この書は高麗の諦観上人の作で、天台宗の教義の大綱と、実践修行の要略を説いた入門書である。これは広く一般仏教の常識を合わせて説明している為仏教の入門書としても勢至丸に授けられた。源光上人の講義を聞いていた勢至丸は、折々に竹で作った札の籤をさし、疑問点を源光上人に質問した。そこは昔から天台宗で行われる論議の時、かならず指摘されたところであった。源光上人や周りの僧たちは「これはただものではない」とささやいたという。源光上人のもとで生活をはじめた勢至丸は、一緒にいた弟子たちの中で、

日増しに頭角をあらわしていった。その姿を見て源光上人は喜んだが、こなすばらしい少年が、いつまでも一緒にいたのではもったいない。いつそ有名な学僧につけて、天台宗の奥義を究めさせるべきだと思ふようになった。そこで、源光上人は勢至丸を連れて、功德院に住む皇円阿闍梨のもとに行った。皇円阿闍梨は藤原重兼の長子で、肥後の阿闍梨と言われた。比叡山に登って皇覚上人に師事し、天台宗の奥義を究めた。天台宗の教えばかりでなく、諸宗の学問も講義した。広く日本の歴史にも通じ、神武天皇から、堀川天皇に至る千数百年の歴史を記した『扶桑略記』の著者としても有名である。当時比叡山第一の碩徳といわれた皇円上人である。勢至丸が師事するには願ってもない人であった。皇円阿闍梨は賢い勢至丸のことを源光上人から聞かされ、楽しみにしていた。皇円阿闍梨は勢至丸に会う前の夜に夢を見た。それは「満月が部屋に入る夢」であった。勢至丸に会った皇円阿闍梨は、この夢こそ「すばらしい才能を持つ少年に会える前ぶれであったのか」といって喜んだという。



院号授与

池月院	笠	イツエ	殿
普照院	鳥取	クニ子	殿
清崑院	井上	清子	殿

11月23日お十夜法要の折、3名の方が院号をお受けになりました。寺の法要で法話を聞くということは、仏の世界の聞法の歓びに繋がることだと思います。日々念仏の道にご精進されることを願います。

釈尊の生涯 スダッタの帰依と寄進

これまでガンジス河の南岸、ムリガダーヴァとラージャグリハを中心として、この二点をむすぶ路線上に行われていた釈尊の伝道は、スダッタの登場によってガンジス河の北岸におよぶことになった。

コーシヤラ国の首都であるシユラヴァステーに住む豪商スダッタはラジャグリハの郊外に仏陀とおおがれる釈尊のましますことを聞き、心ひかれるままに竹林におもむいて釈尊の尊容を拝し、したしく説法を聞いて心に喜びをいだき深く帰依するにいたった。

スダッタはこの喜びを自分の国の人たちにもわかち与えたいと思い、釈尊が安居（あんご）の時期を過ぎられる土地を探し始めた。

やがてシユラヴァステーの郊外にコーシヤラ国王プラセーナジットの太子ジエータが所有する土地が最適と見定め、その分譲を太子に願ひ出た。この交渉は難航したが、ついに黄金を敷き詰めた面積だけを譲渡するという申し出があったので、スダッタはすぐに黄金を満載した車を繰り出して広大なジエータの土地を黄金で敷き詰めそうになった。

この状況を見たジエータ太子は全財産をなげうってまで釈尊を迎えようとするスダッタの心根に感動して、「私にも寄進するだけの土地を残して貰いたい」ともし出たのだった。このようにしてこの地に精舎が建ち並び、釈尊とその弟子たちを迎えることができたのである。

これが有名な祇園精舎である。スダッタはもともと物欲の少ない人であつたが、莫大な財を精舎建立のためにおしみなくつきこんだ。この偉大な行為は、報酬を露ほども望まない文字通りの喜捨のこころによるのである。

布施とはまさにこのような喜捨をいうのである。このようにして釈尊の伝道教化がガンジスの流れを渡って、北岸の各地におよぶにいたったのは、このスダッタの祇園精舎建立に端を発するといふことができる。

※安居（あんご） インドは雨期は降雨が甚だしいので、遊行行乞することができない。そこで、釈尊の弟子が一定の地に九十日間、遊行中の罪障を懺悔し、かつ釈尊の教誡を請ひ、たがいに修行に精進して、最終日にその総括をする自恣法をおこなって再び遊行伝道に出発する。

平成二十五年度年回繰出し表

一周忌

（平成二十四年）

三牧 摩利子殿	堀 正勝殿	笠 元實殿	吉 宗治殿	田 光宗殿	井 篤志殿	角 篤志殿	吉 篤志殿	中 篤志殿	浅 篤志殿	日 篤志殿	中 篤志殿	中 篤志殿	岡 篤志殿	遠 篤志殿	笠 篤志殿	原 篤志殿	森 篤志殿	古 篤志殿	高 篤志殿	笠 篤志殿	
古賀 富美子殿	藤 邦寛殿	古賀 秋男殿	山口 サダエ殿	山口 サダエ殿	永富 正殿	戸田 文子殿	戸田 文子殿	中 篤志殿	高橋 政喜殿	梶原 惠子殿	笠 篤志殿	宮崎 藤男殿	熊丸 美紀子殿	高田 雅祥殿	堤 寿奈夫殿	佐藤 チク殿	笠 篤志殿	緒方 貞子殿	石丸 龍子殿	中尾 美昭殿	
甲斐田 ヤエ殿	海老名 愛子殿	中原 建一殿	北島 瑞江殿	山田 安生殿	野口 シゲ子殿	中尾 久美子殿	中尾 久美子殿	成田 トヲノ殿	竹島 俊子殿	浅野 重幸殿	藤村 トミヨ殿	鶴 甫殿	尾形 亨殿	井上 弘昭殿	木下 哲士殿	池田 寿利殿	平田 睦夫殿	河原 シツエ殿	北島 スミ子殿	澤 久子殿	中野 元子殿

三回忌

（平成二十三年）

水田 井嶋 原島 中島 太田 徳永 山下 堀辺 熊崎 青木 青木 高田 笠原 中園 山口 中村 多賀 近藤 坂井 加納 井手 北村 森山 篠原 中島 江崎 中原 中島 熊丸 多賀

陽子殿 好香殿 昭子殿 満子殿 記久男殿 正枝殿 博殿 弓子殿 勝典殿 勝太郎殿 久枝殿 幹雄殿 志津子殿 みどり殿 シヅエ殿 義高殿 政子殿 道輔殿 美恵子殿 清幸殿 国雄殿 廣子殿 文子殿 フサオ殿 淳男殿 文男殿 満二殿 泰子殿 満子殿

松木 笠智 笠恵 笠俊 笠光 宮川 中原 宮崎 木下 田熊 轟 石里 中野 石松 小林 野村 谷口 木下 山田 熊丸 平田 (平成十九年) 柴田 城後 足立 真鍋 原昭

秀俊殿 恵子殿 子エ殿 江子殿 静嘉殿 昭三津代殿 淳子殿 利太郎殿 正行殿 民隆殿 守隆殿 照子殿 ミヨ子殿 京子殿 重男殿 門蔵殿 定幸殿 マサ子殿 勝恵殿 吉郎殿 スズ子殿 辰男殿 智恵子殿 昭子殿

七回忌

津福 草場 耕崎 広木 笠原 大里 笠川 下川 坂井 柴田 仲道 笠敏 青木 笠ミドリ 角正 井上 岡崎 堀田 富里 川浪 肥後橋 島岡 五百住 広瀬 梅津 平木 大中 豊田 町野 富澤

カヲル殿 シヅエ殿 武男殿 みよ殿 ミツ敏殿 盛敏殿 明久殿 喜介殿 紀代子殿 チツヨ殿 ツギエ殿 ミドリ殿 正郎殿 市平殿 公良殿 藤子殿 トミ殿 シズエ殿 明美殿 タミエ殿 フジエ殿 健生殿 ヒサノ殿 政登殿 シヅ子殿 雄士殿 朋子殿

十三回忌

平田 近藤 石橋 馬場 首藤 笠喜 堤キク 西牟田 石橋 今村 古賀 (平成十三年) 鈴木 堤清 篠崎 佐藤 笠スエ 古賀 川島 川喜美 笠井 辻田 笠健 小島 中原 山崎 鳥取

政昭殿 正宏殿 富夫殿 新殿 怜殿 三枝殿 キクエ殿 幸男殿 靖江殿 壽子殿 一義殿 誠三殿 清子殿 猛殿 實殿 エカ殿 由記殿 喜美子殿 俊郎殿 恒一殿 健吾殿 伸一殿 憲彦殿 照子殿 マサ子殿

坂井 荒木 井上 笠俊 津福 柴田 別府 佐藤 石田 平島 与賀田 木下 戸田 熊崎 田中 野島 竹留崎 津留崎 古賀 高山 徳永 鹿毛 高田 大西 笠ツヤ 笠義 中原 ヒサノ殿

久雄殿 志津子殿 英幸殿 一郎殿 武雄殿 米子殿 定子殿 榮之祐殿 秋雄殿 春次殿 州治殿 秀一殿 新殿 滋殿 傑殿 清殿 ヒサ子殿 真一殿 清殿 サエ子殿 高俊殿 高子殿 トキエ殿 ヤ子殿 男殿 義男殿

十七回忌

奥田 園田 中島 古賀 古賀 後藤 熊丸 首藤 中原 堤重 倉重 城後 平田 中島 高松 野田 下川 佐藤 井上 河原 三根 下川 山口 藤井 宮崎 中原 古澤 (平成九年) 奥田 園田 中島 古賀 古賀 後藤 熊丸 首藤 中原 堤重 倉重 城後 平田 中島 高松 野田 下川 佐藤 井上 河原 三根 下川 山口 藤井 宮崎 中原 古澤

昭太郎殿 眞幸殿 可祝殿 兔象殿 勝信殿 ミヤコ殿 登殿 七子殿 武次殿 知一殿 千鶴子殿 悟殿 フジエ殿 虎雄殿 ナツエ殿 蔵嗣殿 順弘殿 千枝殿 重徳殿 久敏殿 サツキ殿 フテ殿 スナエ殿 舜輔殿 留蔵殿 重光殿 照子殿

遠藤 正代殿 笠原 宏俊殿 中園 総雄殿 武田 総雄殿 笠原 おさむ殿 山口 登殿 川浪 裕子殿 稲吉 岐殿 佐藤 守殿 原田 トヨ子殿 重松 秀子殿 仲道 武殿 池尻 敏雄殿 中島 スエ殿 具島 淳一殿 小島 俊夫殿 熊丸 シカ殿 北村 一美殿 緒方 きぬ殿 岡崎 ミサヲ殿 古賀 みどり殿 藤原 利夫殿 吉武 光喜殿 平田 スエノ殿 稲吉 マチエ殿 中原 輝夫殿 山口 道博殿 馬場 英雄殿 笠原 ユキエ殿

山 下 剛殿 鶴 剛殿 河 剛殿 遠 藤 傳殿 井 手 澄子殿 青木 ハツネ殿 中島 ハツエ殿 安藤 緑殿 木下 スエノ殿 高田 チカヘ殿 山下 高喜殿 坂井 喜晴殿 城後 サダエ殿 下川 ヲソノ殿 井手 重登殿 俣野 衛殿 森 フサ殿 熊丸 キミ殿 原田 洋子殿 坂井 保殿 江崎 重春殿 嶋 辰殿 小島 シカ殿

二十五回忌

(昭和六十四年)
(平成元年)

井 嶋 邦男殿 荒 巻 ユキ殿 江 頭 セキノ殿 池 田 サト殿 江 口 ユキノ殿 広 木 正喜殿 鳥 取 久夫殿 赤 司 三雄殿 秋 山 道子殿 中 津 つな子殿 山 口 勝殿 笠 七 月 殿 下 川 峰雄殿 中 原 マサノ殿 別 府 豊殿 藤 芳 タキノ殿 柴 田 健吾殿 井 手 翠殿 北 島 サダ子殿 熊 崎 勇殿 野 田 時恵殿 古 賀 ヲシノ殿 佐 々 木 良藏殿 田 辺 好水殿 藤 吉 寛藏殿 中 原 今村殿 下 川 フジ殿 笠 佐 藤 松代殿 山 口 ヤエ殿 中 津 ハルエ殿 秋 山 ミチヨ殿 赤 司 マサエ殿 鳥 取 ヲナヨ殿 広 木 照子殿 江 口 利香殿 池 田 正信殿 江 頭 章娘殿 荒 巻 浅次郎殿 井 嶋 サカエ殿 笠 原 浅次郎殿 高 山 浅次郎殿 青 木 章娘殿 池 田 正信殿 橋 爪 正信殿 江 口 利香殿 廣 木 照子殿 鳥 取 久夫殿 赤 司 三雄殿 秋 山 道子殿 中 津 つな子殿 山 口 勝殿 笠 七 月 殿 下 川 峰雄殿 中 原 マサノ殿 別 府 豊殿 藤 芳 タキノ殿 柴 田 健吾殿 井 手 翠殿

三十三回忌

(昭和五十六年)

三 根 弥之助殿 廣 田 タネ殿 鶴 田 美智子殿 城 戸 源吾殿 野 田 フサノ殿 高 橋 チヨ子殿 高 橋 伸治殿 重 松 種藏殿 浅 田 清殿 豊 福 清殿 財 津 キクエ殿 原 野 マツ殿 本 田 クニ殿 戸 田 茂殿 中 原 睦雄殿 梯 巍殿 松 栄 壮太郎殿 戸 田 タカ力殿 鶴 理 平殿 四 か 所 喜一郎殿 田 中 正廣殿 下 村 義雄妻殿 中 村 省三殿 林 田 文也殿 山 下 宗太郎殿 中 原 アキノ殿 龍 頭 マサ殿 古 賀 禹子殿 高 橋 ハルエ殿 秋 山 久次殿 中 尾 国枝殿 高 田 和子殿 鞍 打 辰夫殿 高 田 孝子殿 廣 田 孝子殿 津 福 トメ殿 本 司 ツル殿 吉 松 イト殿 中 原 ハツ殿 古 賀 晴美殿 下 川 芙美枝殿 中 原 儀三郎殿 西 牟 田 ヲネ殿 高 木 勘平殿 中 原 弘殿 高 田 平次郎殿 佐 藤 三平殿 笠 勘 吉殿 木 下 勇殿 河 原 辰次郎殿 山 中 輝雄殿 下 川 馨殿 笠 サワ子殿 中 村 ヒデ殿 松 村 イセノ殿 熊 丸 恵公殿

五十回忌

(昭和三十九年)